好きこそものの上手なれ

第54話

回胴倒錯者

—PACHISLO FREAK—

苦肉

時刻は深夜の1時、いつもなら閉店作業を終え、帰路につく時間帯だ。しかし今日は違う、大晦日から元旦にかけて開催されるオールナイト営業の真最中なのだ。従業員は深夜番に代わっており、私は2度目の出勤中だった。ホールを映し出すモニターをチラリと見てみる、空席が目立ち昨年の面影はない。ホールコンピューターをチェックしてみてもその売上額はホールのそれと同様だった。

ガチャッ、ふいに事務所のドアが開き店長が入ってきた。

「ひまそうだねぇ、どう？売り上げは？」

「思わしくありません」

店長は私とこう話しながらホールコンピューターの前まで歩いて行った。

「だめだねぇ」

それを見た店長の一言だった。その表情や声のトーンはいつものそれとは違っていた。いつもなら明らかな不機嫌状態になり、声もきつくなる。もしくは高笑いだ。今回はそのどちらでもない。普通なのだ。いや、普通を装っている？いや違う、何かが違う。これをたとえて言うなら次のような感じだ。吉宗にて遊戯を開始するとする。最初の千円でボーナス当選を期待するだろうか？確かに期待はしているだろう、しかし、それは期待大の期待ではなく、ほとんど無いに等しい期待だと思う。だから最初の千円を使い切ったとき、「千円で当選しなかったことが悔しくてしかたがない！」なんて思わないはずだ。「まぁ、千円で当選するわけないわな」と思うのが普通である。この時の店長の表情はこの状況のそれに似ていた。多分そうなるだろうという予想の中にある微かな期待、その期待を予想通りに裏切られた時の表情なのだ。

店長がホールコンピューターを見ていた時間はわずか数秒、その後はホールを映し出しているモニターを見ていた。その横顔は無表情であり、視線は変わらず、多々あるモニターのうちの1つのモニターだけを、いや、そのモニターの一点だけを見つめている様子だった。この場合、人は何か考え事をしていることが多い。数分後、店長が口を開く。

「ちょっと部屋で休んでくるわ」

「はい」

モニター前から事務所のドアに向かう時の店長の表情がさっきとは少し変わっており、私には、さっきの表情に、ある種の覚悟をプラスしたような感覚を与えた。

ホールの設定状況をすべて知っている私だからこういった推測に落ちついたのかもしれないが、そうでなければ説明がつかないのもまた事実である。売り上げと粗利を何とか上げたい苦肉の策は、すでに負の連鎖の終盤に差し掛かっていると言ってよい。私が推測したものの正誤はきっと正の方だろう。その証拠は簡単である、この時の設定配分を読者の皆様はどう予想しただろうか、皆様が予想したそれはきっと正解なのだ。

疑心暗鬼

店長が出て行ってからの事務所内は時折従業員のインカムの声が聞こえてくるものの、それ以外は静寂だった。なんとなく当店のデータベースを覗いてみた。開店年の大晦日の売り上げは本日の倍どころの騒ぎではない。3倍、4倍でも収まらない。昨年のそれも本日のそれとは比べ物にならない。もちろんまだ深夜の2時前であり、あと19時間も営業時間が残っているわけだから当然ともいえる。だが、それを加味してみても前述の通りでそれ以下に収まりそうにない。開店年は店の台所事情を知るすべもなく、また興味もなかった。それは昨年も同様だ。今回初めてこれらの事実を知ったのだ。あまりの違いに愕然としてしまった。再びホールを映し出すモニターに目を向ける。昨年の例からいうと今が一番の稼働のピークの時間帯だ。しかしそこにはピークというには悲しすぎる現状がある。従業員の士気の低下も見て取れる。

トゥルルルル…。静寂の中にいきなり電話が鳴りだした。

「はい、○○店です」

「あ、俺だけど、店長いる？」

誰もが恐れる部長だった。ドスの聞いた声が威圧感を倍増させた。

「いえ、今は休憩中です。呼びましょうか？」

「いや、別にいい。ただオールナイトの様子はどうかなと思ってね」

「はい、あまり良い状態とは言えません」

「あっそ、稼働は？」

「4割です」

「売りは？」

「○○です」

「割りは？」

「○○です」

「ダメだね、ここからどれくらい伸びると思う？」

「はい、○○万くらいでしょうか」

「全然ダメだね。ま、いいわ、残りも頑張ってくれ」

「はい、失礼します」

部長からの電話は極めて珍しい。唐突に店に現れて話をすることはたまにあったが、部長の電話に出たのは初めてだ。もちろん毎年オールナイト時にかかってくる電話で例年なら店長が出るのかもしれないが、今の状況が状況だけに、よからぬことを勘ぐってしまう。この電話の意味はやはり店長の様子と関係しているのだろうか？なにもかもがマイナスの方向へ向いてしまっている私の心は、この電話で完全に疑心暗鬼で満ち溢れてしまった。

A氏プロフィール

三重県出身。三重の高校を卒業後、進学のため大阪へ。学業よりもパチスロに専念してしまいお決まりコースの大学中退。中退後3年間はパチスロで生計を立てる。その後サラリーマンになるも副収入はパチスロで。結婚のため三重に戻りホール店員となる。現在は知識と経験を生かし某店で設定師として手腕を振るっている。目押しレベルはスイカの種まで直視できるほどの異常っぷり。

■思い出の4号機たち■

●ワイワイパルサー（1996年・山佐）

ニューパルサーの大ヒットの後、それを継承した（リーチ目などのゲーム性）台がいくつか発売されたが、販売記録はイマイチだった。そして登場したのがカエル絵柄採用のこの機種。ただ、リーチ目に変更した点が多く、ニューパルフリークからはかなりの違和感があった。よってこの機種の販売記録もイマイチ。個人的には分かりやすいリーチ目だったので受け入れやすかったのだが。

いつも斬新な発想を生み出す山佐だが、この機種に採用された斬新な点は、「枠内に4つ以上のチェリー出現でリーチ目」といったものだった。当時、このリーチ目を見るためにわざわざ毎回チェリーを全リールで狙っていた記憶がある。

●フローズンナイツ（1996年・ユニバーサル）

コンドル発売後のユニバーサル（旧アルゼ）は技術介入路線まっしぐらで、リプレイハズシは当たり前のように搭載されていたが、この機種は配列上それが不可能だった。リプレイハズシ無し＝残念な台、という考え方だった私には受け入れがたかったが、実は技術介入性はおおいにあった。通常時にきっちり子役とり切ることで、千円当たりのゲーム数が大きく向上する。特にシングルボーナスを取りこぼすと、リーチ目っぽい出目になり紛らわしい。毎回シングルを狙うのが面倒で普段はあまり打たなかったが、コンドルやタコスロで負けた後の暇つぶしとして打っていた。

●タコスロ（1996年・瑞穂）

コンドルよりも難易度が高いビタ押しハズシが必要だった。技術介入性は極めて高く、技術介入の恩恵が得られる上位機種。設定1でのフル攻略はコンドルの機械割を超えており、105%と言われている（高設定域ではコンドルが上）。等価交換で1日打てば日当は十分出た。リール制御が独特であり、ズルズルスベる。スベっていればリーチ目といったものも多く、ただのハズレと勘違いして放置されていることも。完全ハズレ目でやめるのが鉄則。中段リプレイ揃いはリーチ目となるが、もちろんボーナス成立後のリーチ目だ。どれだけ注意していてもたまに出てしまう中段リプレイ揃い。リプレイ揃い時の効果音「プンプンプンッ」が中段揃いで鳴ったとき、なにか妙に笑えてくる。こういう曖昧さが打ち手を引き付けた理由の1つでもあるだろう。MAXベット初搭載は確かこの機種だったと思う。

●ゲッターマウス（1996年・エレコ）

それほどシビアな技術介入は必要ではなかったが、スペックはかなり甘い。甘すぎて等価交換では使えないという理由で、若干確率を抑えた「ゲッターマウス2」も発売された。右リールのネズミ三兄弟は次郎くんだけが嫌われ者。「お、リーチ目だ！いや、次郎か…」という風に、「一郎・三郎の場合はリーチ目なのに次郎の場合はただのハズレという出目がたくさんあった。コンドル・タコスロほど技術介入というイメージはなかったものの、時代を代表する名機なのは間違いない。